ISSN 2186 − 3989

布橋灌頂会（日本ユネスコ「未来遺産」登録行事）と雅楽の関係

福江　　充

The Relationship between the Cloth Bridge Consecration（Registered as a Japanese UNESCO「Future Heritage」Rite）and gagaku

Mitsuru Fukue

北　陸　大　学　紀　要
第43号(2017年12月)抜刷

北陸大学紀要
第 43 号（2017）
pp.65～73
〔研究ノート〕

布橋灌頂会（日本ユネスコ「未来遺産」登録行事）と雅楽の関係

福江　充*

The Relationship between the Cloth Bridge Consecration（Registered as a Japanese UNESCO「Future Heritage」Rite）and gagaku

Mitsuru Fukue*

Received May 31, 2017

Abstract

During the Edo period, Etchū's Tateyama was thought of as a place where hell and the Pure Land—the Other World—existed in the mountains. Men could enter the Other World and gain a virtual experience of death by climbing the mountain Tateyama. Their ritual ascent involved difficult austerities that were compared to the sufferings of hell, and they descended the mountain believing that they had eradicated their sins. In this way, men renewed their lives, and were guaranteed a peaceful existence in this world and rebirth after death in the Pure Land.

At that time Tateyama was considered a sacred site that was forbidden to women. Temple priests in the town of Ashikuraji in Tateyama's foothills therefore provided a rite for women who could not climb the mountain, which had the same meaning for women as the ritual climbs had for men. The Cloth Bridge Consecration, a rite for women who aspired to rebirth in the Pure Land, was performed at religious structures in the town: the Enma Hall, the Cloth Bridge, and the Uba Hall. Local documents tell us that the Cloth Bridge Consecration thrived during the latter half of the Edo period, but that performances ceased during the early Meiji period movement to separate shrines and temples (called Shinbutsu bunri or Haibutsu kishaku). In 1996, after 136 years, the rite was recreated as a modern festival of national culture. A committee was formed on that occasion which developed the Cloth Bridge Consecration into an event that has taken place six times to date.

Research on the Cloth Bridge Consecration has, until now, indicated that *gagaku* music was not part of the rite during the latter half of the Edo period. However, recently a document has surfaced from 1886 (in the collection of Daisenbō, Ashikuraji) which raises the possibility that *gagaku* was included in the Cloth Bridge Consecration during the Bakumatsu period.

* 国際コミュニケーション学部　Faculty of International Communication

In this article, I introduce that 1886 document and explore the use of *gagaku* in contemporary Cloth Bridge Consecration events.

はじめに

江戸時代、越中立山は人々の間では、山中に地獄や浄土がある「あの世」と考えられていた。男性はあの世の立山に入山することで擬似的に死者となり、地獄の責め苦に見立てられた厳しい禅定登山を行うことで、自分の罪を滅ぼして下山する。こうして新たな人格・生命に再生し、現世の安穏や死後の浄土往生が約束された。しかし、当時の立山は女人禁制の霊場であった。そこで山麓の芦峅寺村（現、富山県中新川郡立山町芦峅寺）では、立山に入山できない女性に対し、男性の立山禅定登山と同じ意味をもつ儀礼として、村の閻魔堂・布橋・姥堂の宗教施設を舞台に、女性の浄土往生を願って「布橋大灌頂」[1]（以下、布橋灌頂会と称する）の法会が開催された。

地元宿坊衆徒の主催により、全国から参集した女性参詣者は閻魔堂で懺悔の儀式を受け、次にこの世とあの世の境界の布橋を渡り、死後の世界に赴く。そこには立山山中に見立てられた姥堂があり、堂内で天台系の儀式を受けた。こうしてすべての儀式に参加した女性は、受戒し血脈を授かり、男性のように死後の浄土往生が約束されたのである。

この布橋灌頂会については、関係史料から江戸時代後期の盛況が確認できるが、明治初年の神仏分離令、及び廃仏毀釈の影響で廃れた。その後、平成８年（1996）の国民文化祭で 136 年ぶりに現代的に復元され、それを契機として平成１７年、同１８年、同２１年、同２３年、同２６年とこれまで６度、「心の癒しの儀式」として開催されてきた。平成２３年（2011）には、この布橋灌頂会イベントが、女性の救済を目指す儀式の独自性や、地域が一体となって伝統の継承を進めている姿勢などが評価され、「現代の癒し「布橋灌頂会」を永遠に語り継ぐために！」と銘打って、第３回の公益社団法人日本ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産に登録されている。

さて、この布橋灌頂会に関する史料としては、立山曼荼羅と呼ばれる絵画がよく知られているが、それ以外にも芦峅寺宿坊家の旧宝泉坊には、布橋灌頂会の様子などが描かれた巻子仕立ての絵画が残されている[2]。

一方、布橋灌頂会に関する儀式次第書には、芦峅寺一山会所蔵の古記録のうち、天保１３年（1842）『諸堂勤方等年中行事　外数件』（冊子）[3]や安政５年（1858）・同６年（1859）『布橋大灌頂法会職衆請定』（巻子）[4]などがあるが、それ以外にも、前掲の旧宝泉坊には、布橋灌頂会に関する衆徒の配役・配置図が一紙の形態で残されている[5]。

ところで、平成時代の布橋灌頂会イベントには雅楽が含まれているが、前掲の各史料内容を分析すると、布橋灌頂会の衆徒の所作に雅楽が含まれたかたちで表現されているのは、絵画史料の『立山曼荼羅　日光坊Ａ本』（芦峅寺旧日光坊所蔵）だけである。そうしたなかで、最近発見した慶応２年（1866）の『音楽施主帳　当山若僧中』（芦峅寺旧大仙坊所蔵）と題する史料は、幕末期の布橋灌頂会に雅楽が導入された可能性を示している。そこで本稿ではこの史料を紹介し、さらに、現代の布橋灌頂会イベントと雅楽の関係についても一考したい。

１．『音楽施主帳　当山若僧中』に見る布橋灌頂会と雅楽

慶応２年（1866）『音楽施主帳』は、立山山麓芦峅寺の旧宿坊家大仙坊に所蔵されてい

る。形態は、縦 240cm×横 17.5cm の冊子である。同史料は、芦峅寺宿坊家の若僧（剃髪、15 歳から 30 歳まで）たちによる布橋灌頂会への雅楽の導入について、芦峅寺一山の記録として書き残したものである。本節では同史料の翻刻を行い、さらにその内容について若干の検討を試みたい。以下は、『音楽施主帳　当山若僧中』の翻刻である。

【翻刻の際の凡例】

改丁は、』印で示し、その下に例えば（以上１丁表）のごとく丁数を記した。改行は／印で示した。読者の便宜を考慮し私に句読点を挿入した。

【表紙】

音楽施主帳

当山若僧中、慶応二丙寅歳六月大吉日

【本文】

夫音楽者三世常住之妙器、／五韻質直浄居斉調之本源也。／所謂往昔梵天帝釈者、喜見城出、御座者、八部衆来而奏／楽、令部類眷属之調気持増歓／喜。焉弥陀来迎場者、五五菩／』（以上１丁表）薩奏楽、令増行者心念。焉釈／専従忉利天還行祇園精舎、／砌持地菩薩、山海慧菩薩、陀／羅尼菩薩等、幡天蓋、並奏音／楽。行幸鮮白他、令一切衆生／性気自然調和。□（１字難読）去者、遺法／来世。東流而、慶人天上挑之／』（以上１丁裏）也。我朝者従神世、雖用之異／器頗多。然人王三十二代用／明天皇御宇、聖徳太子為国／政、断楽書、残其譜給故、於于／今、都鄙聚楽無隔、普撃鼓音／楽并管弦。以調子於詮直、去／人気於邪曲。然後、神事之祭／』（以上２丁表）祀、法会之執行於庭前、畏然／音楽之調子天懸若。此四方／見聞不歩。依而当山者、永年／之間、楽器中絶而、諸法会祭／祀不用之。是事耳、諸僧等搏／胸、雖悲歎未成。嗚呼、臻哉、維／慶應乙丑（慶応元年〔1865〕）冬、当山若僧連、為仏／』（以上２丁裏）法興隆、発起音楽再興旨、従／初五常楽急至終萬寿楽急ニ、／恋慕、其質直柔軟律義之音／韻、頻憶想。同貳年寅（1866）二月彼／岸会、選吉辰、成就音楽道具／三管壱鼓。直招楽匠、不怠稽／古。同年（1866）八月十五日、彼岸会／』（以上３丁表）中日、布橋大灌頂法会執行／場始奏再興。諸仏如来、称／本誓、仏恩報謝、□（１字難読）智／無依無／怙也爾云。（以上３丁裏）

右前文之通り若気之至り火急ニ／致注文候得共、値段之差別も不弁、／意外之高金相成、師匠懸り之身与／し而、右金子出来方甚ダ迷惑仕、／依而御一山中江満金御願候處、相対／を以御助力被相願候様、御聞済／』（以上４丁表）被成下難有奉謝候。右ニ依而、／御心添速ニ壱鼓三管成就仕大／慶幾久敷、唯願者寄附之御／君子等万之果楽之栄昌希のミ。

慶應弐丙寅年（1866）六月吉日（以上４丁裏）

発起人当山若僧連中

重達世話方

長覚坊清本、大仙坊純尚』（以上５丁表）、教算坊快祐、善道坊泰賢、泉光坊円海、相栄坊慈響、日光坊弘円、泉蔵坊鑁禅、教覚坊知道、龍泉坊左京、宝泉坊昶昶（興昶か？）。一、金六両、宝泉坊。一、金三両貳分、教蔵坊。一、金三両貳分、等覚坊。一、金三両、福泉坊。一、金三両、教算坊。一、金貳両貳分、泉蔵坊。一、金貳両貳分、教覚坊。一、金貳両貳分、三学坊。一、金貳両貳分、吉祥坊。一、金壹両三分、相真坊。一、金壹両貳分、金泉坊。一、金壹両貳分、日光坊。一、金壹両貳分、大仙坊。一、金壹両壹分、相栄坊。一、金壹両、善道坊。一、金壹両、実相坊。一、金壹両、真長坊。一、金三分、宝龍坊。一、金貳分、相善坊。一、金壹分貳朱、長覚坊。一、金壹貳分貳朱、権教坊。一、金三分、泉光坊。一、金壹分、宮之坊。一、金壹両、大御講仲間中ニ而。一、金壹分貳朱、一相坊。一、金壹分、宝泉坊母。一、金三朱、平四郎。一、金三朱、想吉。一、金三朱、

龍泉坊。一、金三朱、大乗坊。一、金弐朱、教順坊。一、金弐朱、武平。一、金弐朱、浄光坊。一、金三朱、善昌坊。一、金弐朱、正怡坊。一、金壱朱、権右衛門。一、金壱朱、宝珠坊。一、金弐朱、玉仙坊。一、金壱朱、四郎兵衛。一、金百疋、阿州名東郡高畠村、小川喜右衛門。一、金百疋、阿州徳嶋城下佐古町、豊助。一、清浄香壹斤、阿州名東郡入田村、松屋利助。一、賽銭之志し有、尾州名古屋安浄寺、丸一屋北、七宅ニ而。一、金壹分壹朱、右講中志し。

さて、上記の史料内容を整理しておきたい。１丁表の巻頭から２丁裏２行目までは、雅楽と仏教の関係についての件である。そこでは、梵天帝釈と雅楽の関係や釈迦と雅楽の関係、我が国の聖徳太子と雅楽の関係などについて記されている。

２丁裏２行目以降は、芦峅寺一山と雅楽の関係が述べられている。その内容を整理すると次のとおりである。慶応元年（1865）冬、芦峅寺一山の若僧（長覚坊清本、大仙坊純尚、教算坊快祐、善道坊泰賢、泉光坊円海、相栄坊慈響、日光坊弘円、泉蔵坊鏝禅、教覚坊知道、龍泉坊左京、宝泉坊昶昶〔興昶か？〕）たちが、仏教興隆の施策として年中行事に雅楽を導入しようと考えた。その際、彼らが興味を抱いた演目は「五常楽」と「萬寿楽（萬秋楽）」であった。そこで、翌慶応２年（1866）２月、彼岸会の日の吉日を選び、雅楽の楽器・三管一鼓を入手した。そしてすぐに楽匠を招いて雅楽の稽古を行った。実演の計画としては、慶応２年（1866）８月１５日、彼岸会の中日に開催される布橋大灌頂法会の執行道場で、初となる雅楽の演奏を行い、この儀式を再び盛り上げていきたいと考えていた。

ところで、雅楽の楽器を入手する際、みんな若気の至りから楽器の値段についての検討を怠ったので、いざ楽器が届くと、その値段および請求額が意外にも高値となっていて困ってしまった。雅楽の師匠にも指導してもらっており、そうした諸経費で困ってしまった。そこで芦峅寺一山全体で全額を負担してもらえるように依頼をしたが、聞き届けられることとなった。したがって、すみやかに一鼓三管の代金を支払うことができた。

巻末には、雅楽の一件に関する寄進者名と寄進金額が記されている。寄進金額の合計は４６両１分３朱２００疋である。その他、清浄香１斤と金額は不明であるが幾ばくかの賽銭が寄進されている。このうち、最も多額の寄進者は宝泉坊で、宝泉坊の家として６両と、さらに同家主の妻から１分の併せて６両１分が寄進されている。芦峅寺一山宿坊家の３３坊５社人のうち、善照坊だけが寄進していない。これは、同坊が弘化２年（1845）に火災を起こし、その影響で経済的に困窮していたからであろう。

この史料には、慶応元年（1865）以降の布橋灌頂会に、実際に雅楽が導入されたことを直接的に示す記事は見られない。したがって、慶応２年（1866）の布橋灌頂会に雅楽が導入されたことについては、必ずしも確定しているとはいえない。ただし、若僧たちの雅楽導入に向けての一連の取り組み状況から考えると、慶応２年（1866）の布橋灌頂会には雅楽が導入されたことはほぼ間違いなかろう。

２．参詣者による布橋灌頂会への雅楽の持ち込み

天保１１年（1840）、当時民衆の間で熱烈な信仰と人気を集めていた木食聖の義賢が、同年８月に越中立山を訪れ、山中で籠もり修行を行っている。その一件を芦峅寺一山衆徒が記録した冊子『義賢行者当峯山籠中復覆』（芦峅寺大仙坊文書）には、同年の秋彼岸に芦峅寺で行われた布橋灌頂会に義賢が参加したこととともに、知多郡半田村の人々が音楽（雅楽）を持ち込んで参加したことが記されている。

ただしここで注意が必要なのは、芦峅寺衆徒が自ら雅楽を演奏して、既存の儀式内容を変化させたのではなく、あくまでも、たまたまその年に訪れた外部者によってもたらされ

た一時的な変化だった点である。前述の布橋灌頂会に関する芦峅寺文書が示すように、それ以降は、例年の、雅楽を含まない布橋灌頂会の儀式内容に戻ったものと考えられる。。

３．『立山曼荼羅　日光坊本』と布橋灌頂会

布橋灌頂会が描かれた絵画としてよく知られているのは立山曼荼羅である。現在５１点の立山曼荼羅が確認されており、そのうち２６点の作品に布橋灌頂会の場面が描かれている。

さて、そのうちの１点である『日光坊Ａ本』は布橋灌頂会の場面だけが描かれた作品である。同作品は芦峅寺旧日光坊所蔵）で、その形態を見ていくと、素材は絹本、幅数は１幅、寸法は内寸が 41.0cm×54.5cm、外寸が 124.0cm×64.0cm である。

この作品の図柄の特徴を見ていくと、職衆の持物が詳しく描かれている。画面上段には阿弥陀三尊と二十五菩薩の来迎が描かれている。芦峅寺教蔵坊が信州の立山講から寄進され閻魔堂前に安置された地蔵菩薩坐像や加賀藩からの制札、布橋下の流灌頂の卒都婆なども、ひじょうに丁寧に描かれている。この作品には制作年代等を示すような銘文は見られない。

ところで、この作品の興味深い点は、布橋灌頂会の儀式で式衆の一部が雅楽の楽器をもったかたちで描かれていることである。

布橋灌頂会と雅楽が結びついた事例は、文献のうえでは前掲の天保１１年（1840）『義賢行者当峯山籠中復覆』（芦峅寺大仙坊所蔵）に記載されている尾張国知多郡半田村の人々が音楽（雅楽）を持ち込んで参加したという事例だけである。ただし、ここで注意しておきたいのは、その際の雅楽の演奏者は、当然半田村の人々であり、芦峅寺衆徒が演奏したわけではないということである。事前に練習もせず、一日や二日で、あるいは当日にいきなり雅楽を演奏することは不可能である。したがって、参詣者ではなく、式衆の集団が雅楽を演奏する場面が描かれた『日光坊Ａ本』は、布橋灌頂会に雅楽が導入されと推測される慶応２年（1866）以降の成立ということになる。

４．富山県［立山博物館］の布橋灌頂会ジオラマと雅楽

富山県［立山博物館］が平成３年（1991）に開館して以来、同館の２階展示室には「布橋灌頂会・ジオラマ」が展示されている。これは開館当初からの展示資料で、当時同館で学芸員として勤務していた筆者も、その制作にかかわっている。

このジオラマの閻魔堂と姥堂の施設については、加賀藩御用大工山上善右衛門の芦峅寺姥堂と閻魔堂の設計図が収められた、『加賀藩寺社建築図』（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）清水文庫所収（分類：特 18.6、番号 73）巻子（１巻）の「芦峅姥堂」図と「芦峅焔摩堂」図をもとに縮尺復元して制作されている。また、布橋や布橋灌頂会の儀式の様子については、関係の文献史料に依拠したものではなく、『立山曼荼羅　日光坊Ａ本』（芦峅寺旧日光坊所蔵）の図柄を参考として制作された。それには以下の理由があった。

布橋灌頂会に関する史料を含む古文書史料群としては芦峅寺文書があるが、その翻刻史料集には、①木倉豊信編『越中立山古文書』（立山開発鉄道株式会社、1962 年）、②同編『越中立山古文書（復刻版）』（国書刊行会、1982 年）、③廣瀬誠編『越中立山古記録　第１巻』（立山開発鉄道株式会社、1989 年）、④廣瀬誠・高瀬保編『越中立山古記録（Ⅰ・Ⅱ）越中資料集成別巻２』（桂書房、1990 年）、⑤高瀬保編『越中立山古記録　第２巻』（立山開発鉄道株式会社、1990 年）、⑥廣瀬誠編『越中立山古記録　第３巻』（立山開発

鉄道株式会社、1991 年）、⑦高瀬保編『越中立山古記録　第４巻』（立山開発鉄道株式会社、1992 年）、⑧廣瀬誠・高瀬保編『越中立山古記録（Ⅲ・Ⅳ）越中資料集成別巻２』（桂書房、1992 年）がある。これらの中で『越中立山古文書』以外は、富山県［立山博物館］が平成３年（1991）に開館する直前・直後に発刊されている。皮肉なことに研究が進展した現在でこそ、布橋灌頂会に関する情報が『越中立山古記録』に多く収められていることはわかっている。しかし、立山博物館開館間際の当時は、行政決定された開館日を厳守しなければならないという、時間的制約があり、こうした翻刻史料集からの情報を布橋灌頂会のジオラマに反映することはできなかった。したがって、「布橋灌頂会・ジオラマ」の儀式内容については、前述のとおり『立山曼荼羅　日光坊 A 本』の図柄に基づいて制作されたのであった。同作品の布橋灌頂会の場面を見ると、この儀式を主催する式衆が、笙や篳篥、楽太鼓などの雅楽器を用いている様子が描かれている。したがって、「布橋灌頂会・ジオラマ」にもそれが採用されている。

５．「第 11 回国民文化祭とやま' 96　立山フェスティバル」布橋灌頂会イベントと雅楽

平成８年（1996）９月２９日（日）、布橋灌頂会イベントが国民文化祭の一環で、立山町のイベントとして、富山県［立山博物館］の敷地や施設を活用して開催された。平成１７年（2005）以降、布橋灌頂会イベントは、実行委員会が中心となって３年に１度開催している。平成２３年（2011）には、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の第 3 回「プロジェクト未来遺産」に富山県内で初めて登録された。また、平成２６年（2014）には、布橋灌頂会を１３０年ぶりに再現させたとして、「布橋灌頂会実行委員会」が、地域文化の発展に貢献した団体などに送られる「サントリー地域文化賞」を受賞している。

さて、「第 11 回国民文化祭とやま' 96　立山フェスティバル」で行われた布橋灌頂会イベントについては、開催後、詳細な報告書[6]が刊行されている。同書によると、この時の布橋灌頂会は「布橋灌頂会を現代的に復元したイベント」と位置づけられている。またイベントを企画するにあたって、①史実に裏附けられた考証をベースとする、②演出により宗教行事の色彩を払拭する、③演劇的手法、他のイベントの融合等、④市民参加の場とする、などの点が留意されている。なお、ここでの「史実に裏づけられた考証」といった点では、拙稿[7]が参考とされている。

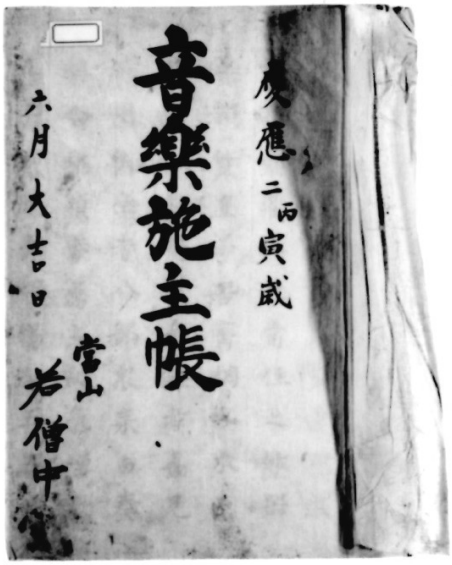
さらに、同書には、「布橋灌頂会の復元にあたって、次の視点で江戸時代の「布橋灌頂会」の内容をセレクションし、かつイベント性を加味して、ドラマティカルに、かつ五感に訴えた部分をややデフォルメして表現した。その意味では、必ずしも、往事の「布橋灌頂会」の再現とはしていないことを断っておく。」との記載が見られる。この文言の通り、実際にとられた演出の概要は、①出演者：雅楽演奏家（６人）は、特別出演。②形態、③施設毎の演出、④持物等小道具類の制作、などである[8]。雅楽の構成は、楽人：さし句頭田淵勝彦、さし・舞・太鼓、本橋文、笙：真鍋尚之、笙・鉦鼓：近藤静乃、笛・鞨鼓：宮丸直子、笛：八木千暁、となっている。

この初回の開催以降、イベントの中身については、資料考証に基づくような抜本的な大きな変更は行われていない。以上指摘したように、これまでの一連の布橋灌頂会イベントにおける雅楽は、資料考証に基づくものではなく、あくまでも演出として導入されてきたものである。

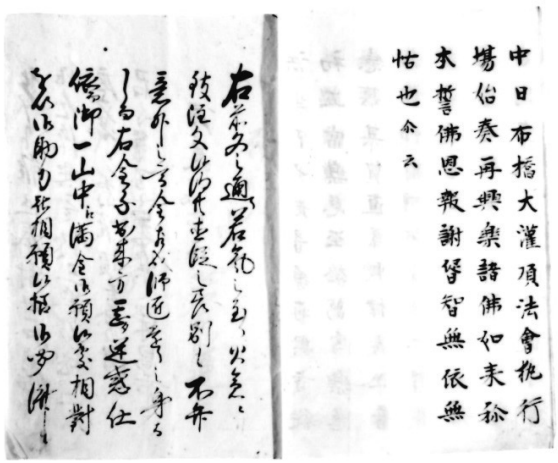
おわりに

以上本稿では、芦峅寺一山と雅楽および布橋灌頂会と雅楽の関係などを記した、慶応２年（1866）『音楽施主帳　当山若僧中』について、紹介と若干の考察を試みた。同史料により、芦峅寺一山衆徒が慶応２年（1866）の布橋灌頂会から、その儀式のなかに雅楽を導入した可能性について指摘した。なお、その際の演目は「五常楽」と「萬寿楽（萬秋楽）」であった。さて、富山県知事・石井隆一氏を筆頭とする現在の布橋灌頂会実行委員会の委員構成を見ていくと、総勢１７名のなかで学識経験者は高岡陽一氏（立山博物館長）、米原寛氏（元・立山博物館長）、新井弘順氏（迦陵頻伽聲明研究会代表）の３名だけである。こうした実行委員会において、今後、本稿の研究成果などが多少なりとも受け止められたり、評価されたりすることがあるのか否か、あるいは本年９月２４日に開催される布橋灌頂会イベントに、研究で判明した雅楽の演目などが反映されていくのか否かといった点にも注目していきたい。

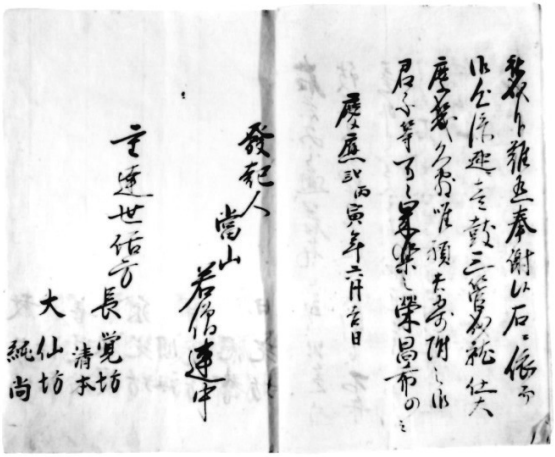
写真１：慶応２年（1866）『音楽施主帳　当山若僧中』（芦峅寺旧大仙坊所蔵）



（その１）



（その２）



（その３）

写真２：「布橋灌頂会」の現代的復元（平成１７年９月１８日、於：富山県［立山博物館］）

註

[1]　拙著『立山信仰と布橋大灌頂法会』（桂書房、2006 年）、拙著『江戸城大奥と立山信仰』（法蔵館、2011 年）、拙稿「立山山麓芦峅寺の布橋大灌頂―日本の民間信仰にみる「灌頂」儀礼―」（森雅彦編『アジアの灌頂儀礼―その成立と伝播―』所収、法蔵館、2014 年）などの文献がある。

[2]　拙稿「芦峅寺宝泉坊の『布橋灌頂会絵巻』と「布橋灌頂会配役・配置図」に関する一

考察」(『富山史壇　第 181 号』所収、越中史壇会、2016 年)。
[3]　天保 13 年（1842)『諸堂勤方等年中行事 外数件』(高瀬保編『越中立山古記録 第 4 巻』所収、立山開発鉄道株式会社、1992 年)。
[4]　安政 5 年（1858)・同 6 年（1859)『布橋大灌頂法会職衆請定　宝泉坊泰音書』(廣瀬誠編『越中立山古記録 第 3 巻』所収、立山開発鉄道株式会社、1991 年)。
[5] 註 2 参照。
[6] 『第 11 回国民文化祭とやま’96　立山フェスティバル報告書』(編集責任者：米原寛内山興亜、編集・発行：第 11 回国民文化祭立山町実行委員会、1997 年 2 月)。
[7]　拙稿「布橋灌頂会の変遷について―文政期から天保期を中心として」(『富山史壇 113 号』越中史壇会、1994 年)。拙稿「布橋灌頂会に関する一考察」(『北陸の民俗　第 11 集』北陸三県民俗の会、1995 年)。
[8]　註 6 前掲書「4.「布橋灌頂会」の復元にあたって－演出プログラム－」(26 頁・27 頁)。